

ワークショップ「サッカーとグローバル関係学」開催報告

B01 班では、人びとのアイデンティティやナショナリズムが形成されるメカニズムについて、地域横断的かつ学際的な視点から迫ろうとしています。その一つの試みとして行われたのが、2017 年 10 月 15 日に成城大学で開催されたワークショップ「サッカーとグローバル関係学」です。

サッカーに言葉は必要ありません。世界中のどこに行っても、ボールさえあれば、子どもたちがサッカーに興じ、やがて大人たちもそこに加わります。紛争によって疲弊した地域や貧困に苦しんでいる地域であっても、多くの人々がサッカーに熱中し、そこからワールドカップで活躍する強豪チームも生まれてきます。もちろん、良いことばかりではありません。サッカーが排他的なナショナリズムを煽ることもあれば、支配の道具になったりすることもあります。このワークショップでは、サッカーという共通の現象から世界各地の問題を読み解いていくことを目指しました。なお、この企画は、グローバル関係学の B01 班と A01 班による主催、成城大学グローバル研究センター (<http://www.seijo.ac.jp/research/glocal-center/>) と同法学部の共催という形で行われています。ワークショップの概要は以下のとおりです。

第一報告、服部倫卓氏（ロシア NIS 貿易会）「ロシアはワールドカップのレガシーを活かせるか？」では、2018 年にワールドカップが開催されるロシアが取り上げられ、国家主導型のサッカー行政について分析が行われました。昨今のワールドカップやオリンピックに関しては、イベント後に残される巨大なインフラが負のレガシー（遺産）と化す現状がしばしば指摘されています。これに対しロシアでは、今回のワールドカップで使用される 11 都市 12 会場のスタジアムは全てサッカー専用として新設されますが、既存スタジアムの殆どが老朽化しているため、大会終了後も有効に活用されるものと考えられています。ただし、同国における平均的な観客動員力を考えれば、新設のスタジアムが過大であることは否定できません。ワールドカップそのものも重要ですが、その後のインフラがどう活用されていくかという点についても注目すべきポイントと言えます。

第二報告、岩坂将充氏（同志社大学）「トルコにおける市民社会とナショナリズム：フットボールが描く社会的亀裂」では、エルドアン大統領の強権的体制が強まりつつあるトルコに焦点が当てられ、政治と密接な関係を持つといわれる同国サッカーの現状について分析が行われました。この国ではサッカー・チームの政治的な色分けがはっきりしていて、エルドアンと彼が率いる与党の公正発展党に近いチーム、そして、それに対抗する勢力に近いチームが明確に分かれています。エルドアン政権の力が強まるにつれ、政府に批判的なチームが体制に飲み込まれていくのか、あるいは、今後も政権から距離を保つチームが維持され、対抗勢力の重要な拠点となっていくのか、については注意して見ていく必要があるでしょう。その点では、サッカーの動向はトルコ政治の行方を考えるうえでの重要なヒントにもな

ると言えます。

第三報告、菊池啓一氏（アジア経済研究所）「国家とサッカー：アルゼンチンの事例」では、1978年にワールドカップが開催されたアルゼンチンについて議論が展開されました。当時は軍政が敷かれていた時代であり、今のアルゼンチン国民にとっては「黒歴史」ということになるのですが、この時のワールドカップにおいて同国は優勝しています。当時の政府はナショナル・チームに対して優勝を厳命する一方、米国の広告代理店とも契約し、軍政というネガティブなイメージを払拭しようとした。とはいえ、サッカーは権力者によって利用されるだけの存在ではありません。政党活動が禁止されるような時代であっても、サッカー・クラブが政治活動の一種の拠点になったという事実もまた、見落とすことのできない重要なポイントです。サッカーが権力者の道具になる一方、他方では市民社会の基盤にもなりうるという点は他の国や地域でも共通して見られる現象です。

第四報告、楠田一千代氏（長崎大学）「西アフリカのサッカー事例：サッカー協会とスポーツ省、プロリーグよりも人気のアマチュアリーグ」では、特にセネガルのナヴェタンと呼ばれるアマチュアリーグに焦点が当てられました。ナヴェタンにはプロ選手も参加可能ですが、一定数以上のプロの試合に出ると出場資格を失うため、プロとしてのプレーを自ら制限する者もいるようです。ナヴェタンには村単位で構成されたチームが参加しており、ダカール州だけでも350ものチームが存在するようです。こうしたアマチュアリーグの存在が、セネガルにおける選手層の厚さを物語っていると言えますが、それはプロリーグ、場合によっては欧州リーグへと収斂していきだけの存在ではなく、各地域のコミュニティに深く根ざした存在でもあります。ここには、グローバルに展開されると同時にローカルでもあるというサッカーの一面が表れていると言えるでしょう。

第五報告、佐藤真紀氏（JIM-NET（イラク医療支援NGO）事務局）「戦時下のイラク、シリアにおけるサッカー事情」では、長期間にわたって混乱が続く地域において、サッカーが持つ意義について検討されました。イラクについては、2003年の戦争直後である04年のアテネ・オリンピックで4位、07年のアジアカップで優勝となっていますし、内戦で苦しむシリアについても、ワールドカップのアジア予選（2017年）においてプレーオフまで進出しています。大変厳しい環境であるにもかかわらず、いやむしろ、そうであるからこそ両国の代表チームは強さを発揮しているのかもしれませんが、両国の復興支援を考えるうえでも、サッカーは子どもたちが元気を取り戻す場として、またアンプティ・サッカー（切断者サッカーの意）は、戦争で手足を失った人たちがシンボリックに活躍する場所として重要な意味を持っています。

第六報告、細田晴子氏（日本大学）「想像の共同体形成のためのサッカー：独裁制から民主制へ（スペインの事例）」では、フランコ独裁時代（1939-75年）のスペインを軸に議論が展開されました。独裁下においては、サッカーも体制に奉仕するだけの存在だったと思われるがちですが、カタルーニャやバスクのように、サッカー・チームによって地域的なアイデンティティが高められたり、あるいは、労働者階級の連帯感が強化されたりといった側面も

ありました。当時のスペインにおいては、公的な場で人が集まって政治的な話をしたり、カタルーニャ語などの言語で話をしたりすることはできなかったのですが、サッカー場は事実上の例外とされていました。フランコ自身、スタジアムにてカタルーニャ語で政治的な会話がなされることを意識的に黙認していた節があります。たとえ独裁国家であっても、サッカーを通して見ると、その社会の複雑性や多元性が浮き彫りになると言えるでしょう。

以上の六報告に対し、二人のコメンテータからコメントを頂きました。安全保障論の福島安紀子氏（青山学院大学）より、スポーツを含む文化が対立や紛争を生み出す原因になる一方、他方では平和構築を支える力になる場合もある点が指摘され、サッカーがポジティブ・ネガティブ両面の作用を及ぼすとすれば、その分水嶺は何処にあるかといった問題について質問がなされました。また、スポーツ社会学の山本敦久氏（成城大学）より、ナショナリズムといったアイデンティティーの要素、および、階級・人種・ジェンダー・植民地主義といった要素がサッカーという場において交錯している点が指摘され、各事例における交錯のパターンについて質問がなされました。

このワークショップでは専門領域を異にする報告者が登壇し、また、多様な国や地域の事例が取り上げられましたが、サッカーという共通言語を介するが故に活発な議論が展開されました。世界各地の全ての歴史や政治に通じることは困難であるにしても、記憶に残る試合や有名な選手が想起されることで、共通の土台で議論することが可能となります。サッカーにはそれだけの力があります。しかしながら、共通言語であることの問題性についても私たちは注意しなければなりません。グローバリゼーションの一つの帰結として、私たちはサッカーという文化を共有し、その文化を介して私たちは世界を理解している（あるいは、理解可能と認識している）のも事実です。このワークショップを一つの手がかりとして、スポーツの視点からもグローバル関係学を展開させていくことができると考えています。

（文責 福田宏）